



Title	教材「地図をいるどる」考(4)
Author(s)	佐野, 比呂己
Citation	国語論集, 10: 79-97
Issue Date	2013-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7449
Rights	

教材「地図をいろいろ」考(4)

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

「教材」地図をいろいろ「考」について

本稿は「教材」地図をいろいろ「考(1)」、「教材」地図をいろいろ「考(2)」、「教材」地図をいろいろ「考(3)」に続くものである。「教材」地図をいろいろ「考」は次のように構成されている。

- | | | |
|---|-------------|---------|
| 一 | 教材「地図をいろいろ」 | |
| 二 | 筆者・鈴木清方 | |
| 1 | 教科書、及び指導書 | |
| 2 | 事典等 | |
| 3 | 鈴木清方年譜 | |
| 4 | 日本画と清方 | 〔以上(1)〕 |
| 5 | 随筆と清方 | 〔以上(2)〕 |
| 三 | 原典『蘆の芽』 | 〔以上(3)〕 |
| 四 | 原典と教科書の異同 | |
| 五 | 大意・文章構成 | |
| 六 | 語句・表現 | |
| | 一六一―一七頁 | 〔以上(3)〕 |
| | 【資料】教科書教材本文 | 〔1〕 |

六 語句・表現

●墨流し【一八①】

模様染の一種。墨汁や顔料を水面に点滴し拡散させて波紋や流水状の模様をつくり、これを和紙や布に吸い取らせ染めたもの。古来、色紙や短冊などに染めた。『古今和歌集』に「春がすみなかし通路なかりせば秋くる雁は帰らざらまし」(巻十 四六五 在原滋春)とあるように、平安時代からずで行われていたらしく、早い例としては『三十六人家集』(西本願寺蔵)や『扇面法華経冊子』(四天王寺蔵)の料紙に下絵の一部として霞や流水にみためた薄墨の墨流が見られ、また春日大社古神宝の蒔絵筆には墨流ふうの蒔絵模様を表わされており、平安時代後期には行われていたことが知られる。鎌倉時代にも『定頼集』(出光美術館蔵)『元輔集』(尊経閣文庫蔵)『成尋阿闍梨母集』(大阪青山学園蔵)などの料紙の一部に薄墨一色の用例がある。文政十三年(一八三〇)序の料紙の一部に薄墨の項には薄墨のほかに藍や紅をまじえることが述べられている。江戸時代には鳥の子紙や奉書のほか羽二重などの絹布類にも応用された。また、仁平一年(一一五一)に広場治左衛門によって越前国(福井県)に広められたとの伝説もあり、越前国武生はその産地として知られ、越前墨流の名で代々広場家が技術を伝承している。越前市今立地区では現在も伝統的な技法が守られ、色紙や短冊などの用紙に漉かされている。京都では大正二年(一九一三)に八木徳太郎

が『墨流し伝授書』を著わし、近年では顔料や樹脂染料を用いた多彩な墨流染が行われている。

●料紙【一八①】

文書をはじめ典籍、經典等の文字を書くときに使用する紙のこと。日本で用いられた料紙は、原料によつて麻紙、楮紙、斐紙、三椏紙等がある。麻紙は白麻、黄麻を原料とした紙で、奈良時代から平安時代初期に多く用いられ、特に写経用として珍重された。コウゾは日本の各地に簇生し、これを原料としたのが楮紙である。原料が豊富でしかも繊維が強卑で実用性に富んでいるため、楮紙は古くから料紙の中心的地位を占めてきた。同じく楮紙といつてもすき方によつて奉書紙、檀紙、美濃紙等の種類がある。ガンビ(雁皮)を材料としたのが斐紙(雁皮紙)で、表面が滑らかで光沢があり、風格があるので、典籍等の重要なものの料紙としてはやくから用いられた。これが文書類に用いられるのは戦国時代に入つてからである。やや黄色みを帯びていることから鳥の子とも呼ばれ、薄手のものを薄様(葉)、厚手のものを厚様(葉)ともいう。ミツマタを材料とする三椏紙は、江戸時代中ごろには生産されるようになったが、文書、典籍等の料紙としてはほとんど用いられていない。

普通の横長の一枚の料紙を縦紙といい、それを横に二つ折にして天地を背中合せにしたものを折紙、縦に二つ折にして左右を背中合せにしたものを堅縦(折紙)といひ、縦紙を縦や横に適当に裁断したものが切紙である。堅紙一紙で書ききれない場合には、これを二枚、三枚と糊ではりついでものを用いる。これが続紙である。書状および書状に起源を有する書札様文書は、本紙のほか礼紙、封紙をともしやうのが普通である。以上は文書類の料紙の形であるが、典籍、經典類は卷子本のほか種々の装丁が行われる。

平安時代に上流社会で多くの紙が消費されるようになると、料紙は詩歌を美しく書くため、さらに紙質が重んじられるようにな

り、美意識の対象となった。なかでも奈良時代からの染め紙は色紙として形式化され、美しくしかも薄く漉ける流し漉きの技法と染色技術が組み合わさつて、打曇(内曇)、飛雲、羅文紙などの漉き模様紙や、金、銀の砂子、切箔、野毛などによる加工紙、また墨流し、切り継ぎ、破り継ぎ、重ね継ぎなどの技法による継ぎ紙など、多種多様の料紙が工芸美術として発達した。これらは書道の発展とも関連して、現在までに多くの傑作が残されている。

●大観【一八④】

広くすべてを見通すこと。広く眺め渡すこと。広く全体を見渡すこと。大局を眺めること。偉大な眺め。壮大な眺め。大きな景色。雄大な景色。

●流れ【一八⑤】

原典では「ながれ」と傍点付きひらがな表記がなされている。

●迂【一八⑥】

まわり遠いこと。また、世間の事情などによく、実用に向かないさま。

●笑われる【一八⑥】

減点では「嗤われる」とある。「嗤う」で「あざわらう」。そしる」の意。

●総武【一八⑦】

上総国、下総国、武蔵国の併称。現在の千葉県中部・北部、茨城県南部、神奈川県北東部、東京都、埼玉県にあたる。

●あまた【一八⑦】

数多。数量の多いさま。数多く。たくさん。

●忘れ水【一八⑦】

野中などを人に知られずに細々と流れている水。絶え絶えに流れている水。人に知られないで流れている水。残り水。

●柄鏡【一八⑧】

柄のついた円形の銅鏡。明からの輸入鏡に影響されて、銅製のも

のが室町時代に始まり、江戸時代に多量に製作された。和鏡の一種で、円鏡と同じ材質の柄のついたもの。室町時代までの鏡は円鏡で、多くは櫛笥の中に納めてあったが、天正年間(一五七三—一五七九)から細長い柄がつくようになり、天下(日本)という銘をつけた。江戸時代になると、婚礼道具の一つとされ、鏡架にかけて使うようになり、鏡面には鶴亀松竹梅などの寿模様を多く用いた。大きさも三センチメートル前後から、口紅をつけるための五センチメートルくらいのものまで各種つくられた。さらに、合せ鏡もできて、化粧上の必需品となった。

■総武の平野には大小あまたの湖沼がある……明かるい月も飛ぶ雲も、影を水の面に映すのであろう。【一八〇七—一八〇九】

水に添えられる舟・月・雲、それらはそれぞれが絵になる風景が表現されている。画家らしい感性にあふれた一文である。

●牛久沼【一八〇九】

茨城県南部、龍ヶ崎市の北西部にある東西一キロ・南北八キロ細長い沼。周囲二十五キロメートル、面積二・九六平方キロメートル、最大深度三メートルと浅い。北から東谷田川・西谷田川下流部が小貝川の土砂でせき止められ半島状の岬をつくっている。

江戸初期には太田沼と称され、鬼怒川の川跡とも伝えられる。寛永年間(一六二四—一四四)の関東郡代伊奈氏による鬼怒・小貝両河川の河道変更によつて農業用の溜池としての役割が生れ、やがて川下の村々一万石の用水路として江川が開削された。寛永十一年(一六三四)には牛久沼西岸に二千間堤が築かれ、元禄年間(一六八八—一七〇四)には小貝川への排水路として八間堀が開削されるなど、沼の氾濫を防ぐ工事も進められた。江川用水をめぐる村村の水争いは激しく、しばしば水論が起り、貞享四年(一六八七)には「川原代村五日、駒馬村二日、両村合七日、龍崎村七日、四ヶ村七日相極」と、田植時の用水配分を定めている。

享保十二年(一七二七)には、牛久村(現稲敷郡牛久町)の豪農桜井庄兵衛が新田開発を試み、宝暦十四年(一七六四)に中止されるまで干拓工事を行った。工事の困難と江川用水流域村々の用水不足によつて工事は挫折し、わずかに十町余の耕地が庄兵衛新田として残った。庄兵衛の負債の返済を条件に九ヵ村は牛久沼の水利権を獲得し、藻草河岸運上米・魚鳥獵運上米各五十俵を含め、三百四十六俵を上納することになった。

景勝地で、魚類も多く、湖岸を走る国道六号沿いには、レストラフ、ドライブインがあり、釣り、観光の客が訪れる。オオカクチョウの渡来もみられる。南の出口に防災用水門が設置されている。牛久市沿岸には画家の小川芋銭記念館や作家住井すゑの居住していた家がある。

●あしの根【一八〇九】

「あし」とは、イネ科の多年草。世界の温帯および暖帯に広く分布し、水辺に群生する。根茎は地中を長くはい、茎は中空の円柱形で直立し、高さ二〜三メートルに達する。葉は長さ約五〇センチメートルの線形で縁がざらついており、互生する。秋、茎頂に多数の小花からなる穂をつける。穂は初め紫色で、のち褐色にかわる。若芽は食用となり、茎は葷菜や製紙の原料になる。根茎は漢方で蘆根といい、煎汁は利尿、止血、解毒などのほか、嘔吐をおさえるのにも用いられる。また、和歌では難波の景物として知られる。よし。学名はPhragmites australis。秋の季語。

平安時代では、忍ぶ恋の比喻として「後撰集」には「したにのみはひ渡つるあしのねの」(雑三・一一三四)とその「根」や、「新古今集」には「難波潟短きあしのふしのまも逢はでこのよを過ぐしてよとや」(恋一・二〇四九・伊勢)とその節と節の間の「よ」の短さを「臥し」や「夜」世にかけて嘆く気持が詠まれた。

「後拾遺集」に「あしのねのうき身の程としりぬれば恨みぬ袖も波

は立ちけり(恋四・七七一・公田母)とあるように、葦の根は泥土の中にあり、節が短く、繁茂し分かれることから「蔓き」「よ」「短し」「わ」「分く」「分かる」にかかる。

●舟【一八⑩】

アワビや海藻採取など沿岸漁業に用いられる小漁船。船底材の長さ二間(約三・六メートル)の三枚板で艀は用いず、四枚の櫂で操縦する。また、湖沼や河川で使用する一人漕ぎの船底の平らな小船。底が平たい小型の和船。さっぱ船。茨城県稲敷郡や千葉県印旛郡では「小舟」の意で用いる。原典では「サツパ」とカタカナ表記がなされており、清方にとってはなじみのない方言であったことがうかがわれる。教科書本文では「さっぱ」とカギ付きひらがな表記となっている。

●扁舟【一八⑪】

小さい舟。小舟。

●五駄沼【一八⑫】

千葉県野田市中里にある沼。面積〇・二平方キロ。昭和三十年代は面積約十二平方キロ。

●手賀沼【一八⑬】

千葉県北西部、利根川下流右岸にある湖沼。東西方向に細長く、周囲三十八キロメートル、面積六・五平方キロメートル、最深二メートル。近世初期に利根川が銚子で太平洋に注ぐ流れに交えられたため逆流した土砂が堆積し、香取海の入口が埋められて沼となった。江戸時代より湖岸に沿って干拓が行われて新田集落が増えたが、たび重なる洪水の被害は大きかった。四回にわたって大規模な普請が実施された。第一回は、幕府の代官細田時徳・近山安高が新利根川の開鑿・印旛沼干拓などと関連づけ見立てたもので、江戸町人万屋治右衛門ら十七名が請方となり開始した。寛文十一年(一六七二)の請負証文によると、歟下年季七年、資金は自分持、大規模

な普請を理由に伊佐部野(手賀組新田が成立)、大瀬野の開発権の取得などが記されている。直後、資金難で離脱する町人が続出し、証人として参画していた海野屋作兵衛らが奮闘し発作新田など沼周辺の小規模新田が成立した。第二回は、幕府勘定所の新田方井沢為永、四川奉行高田次左衛門らが享保十二年(一七二七)に公費で実施し、千間堤を築いて沼を上下に区分し、下沼の干拓に成功し新田方の支配下に置かれたが、のち洪水で千間堤が決壊し失敗。第三回は、元文三年(一七三八)に地元相島新田名主佐治兵衛ら三名が頭取となり、武蔵国忍領の根岸源右衛門・江戸駿河屋権兵衛らの協力を得て実施。成功後の分け前は金主六割・頭取割・根岸と駿河屋二割であったが失敗に終わる。第四回は、幕府代官宮村高豊の見立てで、幕府勘定所が公費で実施。印旛沼の干拓と連動させ、枝利根川(現将監川)の負俵口を締め切り、手賀沼の水を長門堀に流下させたが、洪水のため締切堤が決壊し失敗した。

昭和二十一年(一九四六)食糧増産を目的として農林省が干拓を進め、昭和四十三年(一九六八)に完成して湖の東半部は完全に水田化され、周辺農家の経営規模は拡大した。明治以後、志賀直哉、武者小路実篤などの文人が沼畔に住み、北の鎌倉とよばれたが、近年はJＲ常磐線、成田線沿線の住宅地開発が著しい。そこで家庭雑排水が流入して湖の汚濁が進み、水質汚濁全国一の値を示すほどになってその浄化対策が図られており、湖沼水質保全特別措置法の対象となっている。一帯は県立印旛手賀自然公園に指定され、マコモ、ヨシが茂り、コイ、フナも多く、釣りやボート遊び、散歩に人が訪れる。

織田完之(溝口伝三纂)『印旛沼経緯記』(審書店 昭和四十七年(一九七二))

柏市史編さん委員会『柏市史』資料編一(富勢村誌)(柏市 昭和六十一年(一九八五)六月)

柏市史編さん委員会『柏市史』資料編八(諸家文書下)(柏市

昭和五十四年(一九七九)三月)

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典』

第十二巻(角川書店 昭和五十九年(一九八四)三月)

栗原東洋『印旛沼開発史』(印旛沼開発発刊行会 昭和五十五

年(一九八〇)五月)

千葉県史編纂審議会『千葉縣史料』近代篇明治初期一(千葉

県 昭和四十三年(一九六八))

千葉県史編纂審議会『千葉縣史料』近代篇明治初期二(千葉

県 昭和四十四年(一九六九))

土木学会編『明治以前日本土木史』(岩波書店 昭和十一年

(一九三六)六月)

日本地誌研究所編『日本地誌』第八巻(二宮書店 昭和四十

二年(一九六七))

●青あし【一八⑫】

四、五月ごろ、若葉が伸びて青々としているアシ。水辺に青々と茂るアシ。あおよし。夏の季語。

●すいれん【一八⑬】

本来はヒツジグサの漢名だが、ふつうには同属の水生植物の総称として用いられる。スイレン科スイレン属(属名は*Nelumbo*)の水生植物。学名はギリシア・ローマ神話にある女神ニフに由来する。スイレン属は日本にはヒツジグサとその変種しか自生しない。地下根茎は太く、ワサビ状で水中の地面をはい、太い根を多数地中に伸ばす。葉は光沢があり全縁、長い葉柄があり、通常は水面に浮かぶ。気孔は葉の上面に多い。花期は四月中旬〜九月上旬、花は四枚の萼片に包まれ、八重咲きの花弁の中心に多数の雄しべがある。花弁は萼片とともに十文字に朝夕開閉する。北半球温帯および熱帯に約四十種分布し、現在の園芸種はこれらの種類の交雑により改良、作出

された。

温帯産のスイレンは耐寒性が強く、花色が赤、桃、白、黄色などの品種があり、ヒメスイレンなどごく小形な種類もある。日本には池や沼に野生するヒツジグサ一種が自生する。

熱帯産のスイレンは一般にネッタイスイレンとよばれ、温帯種より大形で多くの品種がある。地下茎が塊茎状のものもあり、花色は豊富で、夜開性のもや芳香種もある。おもなものは、昼開性のエンチヤントメント(桃色)、ピンクパール(桃色)、トレル・プレーザー(黄色)などや、夜開性のミセス・G・C・ヒチコック(淡桃色)、プライド・オブ・カリフォルニア(赤色)などである。花茎は水面上に二十一〜三十七センチメートル伸び、茎頂に花をつける。

すいれんは古代エジプトで神聖視され、すいれんの花冠をかぶつたオシリスの神は復活のシンボルであった。古代エジプトの聖なる色をした青いすいれんは第四王朝(前二六〇〇〜前二四五〇)の神への捧げ物のなかに描かれ、第十九王朝のラムセス二世(在位前一一二五〇〜前一一二三五)の棺からは、五十センチメートルの花茎のついた青いすいれんと、花冠や花輪に使われた多数の白いすいれんがみいだされた。日常の生活でも、水鉢に花がいけられ、女性は渡されたすいれんの花を手にして宴席に臨んだ。

すいれんは睡蓮の意味で、朝開花し、午後に花を閉じるのを、睡ると見立てて名づけられたが、その開閉時間は品種によってまちまちである。日本に自生するヒツジグサは未の刻(午後一―三時)に花を開き、夕方の五―六時に花を閉じる。原典では「睡蓮」とあるのは本来の意味を意識しているからであろう。夏の季語である。

■牛久沼をうるどつては……小さいすいれんのみぎわに咲いていた夏をしのぶ【一八⑭】

水にあしらわれたその風景は色鮮やかであり、四季のうつろいを感じさせる。原典では「青蘆」「睡蓮」と漢字表記となっており、「舟」

「桃」と合わせて漢字表記をすることによって、視覚にリズムを与えている。

■赤い鉛筆で強く円を描く【一八⑭】

「嘗て立ちつくした」地に円を描いたという。単に「訪れた」地ではなく「立ちつくした」地への清方の思いがうかがえる。「赤鉛筆で」「強く」とあることからその思いが伝わってくる。

●小梅【一八⑮】

現在の墨田区向島一―四丁目・業平一―二丁目・押上一―二丁目・横川一―三丁目、江東区大島一丁目・亀戸一丁目など。

大川(隅田川)の東岸にある。南・西は中之郷町、北・東は須崎村。ほぼ中央を水戸への道が通り北十間川にぶつかる。隅田川の業平橋以西は源森川、以東を北十間川(大横川入江)といい、隅田川と交錯して南へは横川(大横川)が流れる。古くは梅香原と称されたともいい、また須崎村など三カ村を含め牛島四カ村と称されたという。田園簿に村名がみえ、田二百三十七石余・畑四十二石余・幕府領万治年中(一六五八―一六一)本所上水・北十間川・横川などが開削された際、耕地が収公され農事に携われなくなった百姓が宅地内での商売を願出て、寛文年中(一六六一―一七三)に許され百姓町屋小梅瓦町が成立。また元禄一年(一六八八)水戸徳川家蔵屋敷となった地の代替地として横川西岸に与えられた地に小梅代地町、別に小梅五反の橋町(現江東区)が成立。これら三カ町(高二四石余・反別二町七反余)は正徳三年(一七一三)町奉行支配に移行し、年貢は代官支配であった。亀戸村・大島村(現江東区)に飛地がある。元禄十年(一六九七)に検地が行われた。このほか持添新田があり、宝暦十年(一七六〇)と安永六年(一七七七)に検地が行われた。化政期の家数六十余。用水は瓦曾根溜井・現埼玉県越谷市)からの水を亀有村(現葛飾区)で分水する古上水堀(本所上水から引水した。古上水堀は大川東岸開拓のため万治二年に開削され、大水

被害で中断、元禄年中修復されたが、享保七年(一七二二)廃止された。廃止後に業平橋以南は埋立てられたが、それより北、亀有村までは通船運河(曳舟川)として改修され、小型船に乗った旅人を岸から綱を付けて曳舟した。水戸への道は曳舟川沿いで曳舟通ともいい、竹町渡から浅草材木町(現台東区)へ通じていた。北十間川沿いは鶴の御鷹場となっていた。業平橋の東にあった檜蔵(材木置場)は元文一年(一七三六)銭を鑄する新銭座となり、廃止後に跡地は遠江横須賀藩西尾氏抱屋敷となった。そのほか越後長岡藩牧野氏・陸奥弘前藩津軽氏らの抱屋敷があった。宝暦頃伊勢桑名(現三重県桑名市)から来住した館次郎が桑名から土を運んで始めた万古焼窯は、安永―天明(一七七一―一八九)頃に有名であったが、高価なこととあつてその後衰退した。日光道中千住宿の助郷村で、文化十二年(一八一五)徳川家康二百回忌法会の社参通行の折には人足七人・馬一匹を負担した。文政七年(一八二四)の江戸買物独案内には足袋股引所の加賀屋久七がみえる。明治五年(一八七二)飛地に本法寺・大法寺・真盛寺の寺地を合併、そのほか武家地も一部合併した。明治二十二年(一八九九)飛地の一部を除き本所区へ合併。明治二十四年(一九一)向島須崎町・向島小梅町・向島中ノ郷町・小梅瓦町・中ノ郷業平町・向島押上町・本所太平町一丁目・柳島梅森町に分属した。

『江戸名所図会』には、元禄六年(一六九三)夏の干天の際、神前に村民が集まって雨乞の祈願をしているところに俳人の榎本其角が参詣に訪れ、雨乞の句を詠んだところ、その日雨が降ったという話が伝えられている。(第七巻十九冊八十丁)

三囲稻荷社 小梅村、田の中にあり(ゆゑに田中の稻荷ともいふ)。別当は天台宗延命寺と号す。神像は弘法大師の作にして、同じ大師の勧請なりといへり。文和年間、三井寺の源慶僧都再興す。慶長の頃まではいまの地より南の方にありしを、後、

このころに移せり。当社の内陣に英一蝶の画ける、牛若丸と弁慶が半身の図を掲げたり。

五元集 牛島みめぐりの神前にて、雨乞ひするものにかはりて
夕立や田をみめぐりの神ならば 宝晋斎 其角

あくる日、雨ふる。

杜僧云く、元禄六年の夏おほいに旱魃す。しかるに、同じ六月の二十八日、村民あつまりて神前にむかひ請雨の祈願す。その日其角も当社に参詣せしに、伴ひし人の中に白雲といへるありて、其角に請雨の発句をすべきよしすすめければ、農民にかはりて一句を連ねて、当社の神前にたてまつりしに、感応やありけん、その日膏雨たちまちに注ぎけるとなり。その草はいまも当社に伝へてあり。

『東京都の地名』(日本歴史地名大系第十三巻 平凡社 平成十四年(二〇〇二)七月)

●亀井戸【一八⑮】

東京都江東区北東部の地名。JR総武線亀戸駅を中心とする地区。東側を中川、西側を横十間川(十間川)、南側を堅川、北側を北十間川に仕切られた地域をいう。かつてはカメに似た形の島であったので亀島とよばれ、のちに陸続きとなって亀村と称した。また、ここに亀ヶ井とよぶ名井があり、この両者が混じて地名となったという。

江戸時代の亀戸村は、御府内の東端に位置し、幕領である葛飾郡西葛西領に属した。幕府の銭座・銅銭鑄造所があり、また亀戸天神で知られた村高は正保年間(一六四四―一四八)のころ二千三百余石、そのうち武家地・寺社地が漸次増加したため、中期以降は千三百石前後となる。元禄十年(一六九七)、村内に亀戸町・清水町・境町の三方町が取り立てられた。この地には安藤(歌川)広重の錦絵に描かれている梅と藤の名所である東宰府天満宮(亀戸天神

社)、臥竜梅で有名な梅屋敷、一説に本所七不思議の一つのおいでけ堀があり、幕府の銭座も設けられていた。また堅川沿いには元佐倉道がはしり、中川には逆井の渡しがあった。明治三十七年(一九〇四)、当地に総武鉄道の亀戸駅が開業し、同年に東武鉄道の乗入れが行われる一方、明治三十年代から大正・昭和の初期にかけては、堅川や中川の沿岸に各種の工場が新設された。また明治三十八年(一九〇五)ころから、亀戸天神裏に三業地が開けて、亀戸花街といわれた。現在も一月の鶯替え神事、四―五月の藤まつり、学業成就の祈願で知られる。南部にあった時計工場は移転し、跡地に時計会社を中心となって開発された多数の専門店や量販店からなる大型商業施設「サンストリート」ができた(平成九年(一九九七)開設)。亀戸駅は東武鉄道亀戸線の起点でもあり、また明治通りが南北方向に通じ、駅周辺は商店街でにぎわっている。いわゆるゼロメートル地帯にある。

蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』巻二十四(『大日本地誌大系』第二 雄山閣 昭和三十一年(一九五七))

『御府内備考』巻百四十五(『大日本地誌大系』第二十四(雄山閣 昭和三十三年(一九五八))

東京都江東区『江東区史』(江東区役所 昭和三十二年(一九五七)十二月)

東京市企畫局都市計畫課編纂『東京市町名沿革史』(東京市企畫局都市計畫課 昭和十三年(一九三八))

●向島【一八⑯】

東京都墨田区北西部の地名。近世以降の江戸の広域地名、東京の区名・町名。隅田川の東岸の地域で、西岸の浅草側から見ると島のようにであったことから地名になったという。東向島とあわせて墨東(隅田川の東の意)地区ともいう。また、江岸一帯の総称でもあって、隅田堤とも葛西堤ともいわれ、春花秋月をもつて老若男女の行

楽地であった。江戸時代中期までは、將軍家の御鷹場であり、農村地帯であった。以前から風光の地として知られ、梅若塚のある木母寺(は京都から下つてきた公卿などが訪れている。享保年間(一七一六―一三六)には將軍徳川吉宗が隅田堤に桜を植えさせ、以後花の名所となった。一帯には牛島神社(牛御前)・三囲神社・弘福寺・長命寺・白鬚神社もあつて、文人墨客の遊所であり、また庶民の行樂地として発展した。さらに、大名などの武士や大商人の別荘地でもあつた。料理屋も建ちならび隅田川の紫鯉の料理が名物であつた。文化元年(一八〇四)には寺島村に佐原菊塙が花園(のちの百花園)を開いている。この付近の村々は江戸で消費される蔬菜類の生産地でもあり、また瓦町では瓦士で消費されている。三囲稲荷の恵美須・大黒、弘福寺の布袋、百花園の福祿寿、多聞寺の毘沙門天、長命寺の弁天、白鬚神社の寿老人は隅田川七福神と称され、江戸の七福神の代表的存在であつた。また三囲稲荷は三井越後屋の帰依を受け、開帳などで賑わつた。明治中期以後、北部の鐘淵紡績会社などの工場進出が盛んとなつた。明治三十二年(一八九九)には東武伊勢崎線が開通し、都市化が進んだ。昭和六年(一九三二)には本所区の小梅瓦町・新小梅町・向島須崎町・同中ノ郷町・同小梅町の各一部を合併し、本所区向島町が誕生した。東京市の市域拡張の結果、昭和七年(一九三二)十月一日南葛飾郡隅田・寺島・吾孺の三町が合併して向島区となつた。昭和二十二年(一九四七)三月十五日、向島区は本所区と合併して墨田区となつた。第二次世界大戦前から玉ノ井付近は永井荷風の『澤東綺譚』の舞台となつた私娼街として知られていた。また向島の料亭街・三業地も著名であつた。昭和五十四年(一九七九)以来、都市不燃化の防災拠点第一号として、白鬚東地区に大集合住宅が建設されている。文人墨客の集う所だつた向島百花園や、長命寺、三囲神社、牛島神社、旧水戸邸跡のある隅田川を挟んだりパークサイドパーク隅田公園などがあ

り、現在でも七福神めぐりなど都民の絶好の散策地である。また、かつては玉の井、鳩の街などの私娼街があつた。向島は、計画的につくられた本所とは対照的に、自然発生的に発展した所で、現在でも家屋密度が高く、金属玩具製造、プレス加工業などの中小企業が密集する地域としても特色がある。

東京都墨田区役所編『墨田区史』(墨田区 昭和三十四年(一九五九))

●柳島(一八〇)

現在の墨田区太平四丁目、深川六間堀地町町の東に続く。東は横十間川を隔て亀戸町(現江東区)、南は下総高岡藩井上氏屋敷・信濃須坂藩堀氏屋敷など、北は柳島町続北本所代地町・柳島村。もとは柳島村の内の田畑で、寛文九年(一六六九)本所一円が町屋となつた際に町屋となり、元禄十年(一六九七)永代売御免とされた。正徳三年(一七一三)町奉行・代官両支配となつた。柳島村の地所であることから柳島町と称したと伝える。町内間数は南側が東西表面口田舎間十八間・南北裏行五間余、北側が東西表面口田舎間百十八間・南北裏行二十間、横川通西側が南北表面口田舎間二十九間・東西裏行二十五間、総小間百六十五間で総坪数三千百八十四坪。反別一町余は柳島村総反別のうちに含まれる。東を南流する横十間川には亀戸町との間に天神橋(長さ八間・幅一丈)が架かつていた(御府内備考)。文政十一年(一八二八)の家数八十八(文政町方書上)。明治二年(一八六九)柳島裏町を合併、同五年旧肥前平戸新田藩松浦氏屋敷、堀氏・井上氏らの屋敷など旧武家地を合併、町域を南の現錦糸三丁目へ広げた。

●本所(一九一)

東京都墨田区南西部の地名。江戸時代以降の村名、広域地名、区名、町名。墨田区の南部一帯を称する地名であつたが、現在は町名として残されている。本庄とも書いた。隅田川の東岸一帯であり、

中世には江戸湾沿いの農村地帯であった。『武蔵田園簿』には伊奈半左衛門代官支配地として本所村九百四石三斗九升九合が記載されている。江戸市街の発展とともに本所中之郷両村の町場化も進んだが、明暦三年（一六五七）の江戸大火ののち、幕府の方針により、急速な市街化が進められた。まず堅川・横川などの掘削りが本所奉行の指揮のもとに行われ、武家屋敷などが割渡された。特に寛文一年（一六六一）の両国橋架設により、本所地域と江戸との交通が便利となり繁栄の条件が整った。正徳三年（一七一三）に中之郷の住民は町奉行支配地に編入され、さらに享保四年（一七一九）には本所奉行は廃止され、町奉行支配となった。明治十一年（一八七八）東京府は十五区六郡に改編した際、本所区が成立、同二十二年市制・町村制施行に際し、南葛飾郡須崎村など六カ村が本所区に編入される一方、本所区亀戸町が南葛飾郡となった。昭和二十二年（一九四七）三月十五日、本所区は北隣の向島区と合併し墨田区となった。江戸時代には武家地・寺社地が多かったが堀に沿って町屋も形成された。このため、近郊の蔬菜を集散する青物市場が、吾妻橋に近い中之郷竹町、堅川筋の本所一ツ目、四ツ目に立ち、賑わった。また源森川筋の中の郷瓦町や小梅瓦町は江戸市中の需要を賄う瓦などを生産する窯業が盛んであった。また明暦の大火の死者を供養する両国の回向院は、勸進相撲の場所として有名であり、さらに地方寺社の開帳場として、両国橋広小路とともに繁華な盛り場として発展した。明治以降は煉瓦工場・ガラス工場・皮革工場などが建設され、工業地帯としての発展をみせた。特に日露戦争後は繊維工業の発展もめざましく、現在の衣服製造業の展開に連続している。江戸時代以来、水害に悩まされ続けた土地柄であったが、現在は商工業を中心に、メリヤス繊維業地域としての特色を維持している。また、錦糸町駅前再開発をはじめ、隅田川沿岸の再開発など、都市構造の変容のなかで、大きな変化を

見せ始めている。

東京都墨田区役所編『墨田区史』（墨田区 昭和三十四年）一

九五九）

●北斎【一九〇】

葛飾北斎 一七六〇—一八四九 宝暦十—嘉永

江戸時代中期後期の浮世絵師。葛飾派の開祖。宝暦十年（一七六〇）九月二十三日、江戸本所割下水（東京都墨田区）に川村某の子として生をうけた。幼年時の事柄についてはあまり明らかではないが、幼名を時太郎といった。四、五歳のころに幕府御用鏡磨師中島伊勢の養子となり、中島氏を名のつたといわれるが、その間の事情は伝わっていない。姓は藤原。幼名を時太郎といわれ、十歳のころに鉄藏と改めた。十四、五歳のころに彫師について木版彫刻の技を学び、また貸本屋の徒弟となったともいわれ、絵は六歳ごろから好んで描いていたと自ら後年に述懐している。ついで十九歳の時にこれを廃して、当時役者絵の大家として一世を風靡していた勝川春章の門をたいて、本格的に浮世絵の修業を始めた。そしてまず与えられた名が春章の別号旭朗井から朗の字をもらって勝川春朗であった。安永八年（一七七九）の細判役者絵『瀬川菊之丞の正宗娘おれん』ほか二図をほぼ同時に発表している。これを手始めに安永九年（一七八〇）には黄表紙を描き、天明期には相撲絵なども画いている。この後、約十五年間を勝川派の絵師として錦絵や黄表紙、洒落本などの挿絵を描いて過ごした。寛政四年（一七九二）に春章が没すると、寛政六年（一七九四）中には勝川派を離れ、狩野融川について狩野派を学び、次に三代目堤等琳について漢画を修得し、住吉広行に従って土佐派を学び、俵屋宗理の名跡をついで琳派を修めて、同七年には二代目宗理を名のつた。しかも司馬江漢の洋風画および銅版画の技法を取り入れ、倦むことを知らず、中国画を研究し、北斎独自の一家風を形成した。狂歌絵本や摺物などを数多く描

いて活躍した。またこのころには戯作も行い、時太郎可候の名で数種の黄表紙を発売している。しかし、寛政十年(二七九八)には宗理号を家元に戻し、北斎を号して独立独歩の作画活動を開始することとなる。この絵に対する情熱とバイタリティは、七十年の絵師生活全般にわたって燃焼し続けた。まず文化一年(一八〇四)ごろから文化十年(一八一三)ごろにかけては読本挿絵の分野に多くの名作を残している。そのなかでもとくに、曲亭馬琴とのコンビによって出版された『新編水滸画伝』や『椿説弓張月』、また柳亭種彦として『近世怪談霜夜星』などは、この時期の読本を代表するものとして著名である。文化十一年(一八一四)ごろより、連年数種の作品を発売してきた読本挿絵は急激に減少し、かわつて絵の教習本ともいえる絵手本に傾注し始める。この方面でもっとも知られるのは、同年より没後も刊行され続けた『北斎漫画』(十五編)である。全巻を通して約三千余図が載せられており、まさに絵の百科事典ともいえる性格をもつていて、わが国はむろん、古くからヨーロッパにもホクサイスケッチとよばれ、多大な影響を及ぼしている。ほかにこの方面では『略画早指南』『三体画譜』『一筆画譜』など、特殊な描法を紹介した絵手本も発表されており、嘉永一年(一八四八)には『絵本彩色通』で油彩画やガラス絵、銅版画などの制作方法を開陳している。このように絵手本は北斎晩年期に一貫して出版され続けたが、その間、文政(一八一八—一八三〇)初年ごろから天保(一八三〇—一八四四)初年ごろにかけては、風景画の代表作『富嶽三十六景』(全四十六枚揃)、『諸国滝廻』(全八枚)、『諸国名橋奇覧』(全十一枚)などのシリーズが集中的に出版されている。その後、天保五年(一八三四)ごろを境として、しだいに肉筆画に傾注するが、天保十四年(一八四三)ごろから日課として描いた『日新除魔』と題されているおびただしい数の獅子の図には、老年期の画風とは思えぬみみずみずしい作品が多数含まれていることに注目される。しかし、不屈

の人北斎も病を得て嘉永二年(一八四九)四月十八日、浅草聖天町遍照院内に没した。九十歳。浅草の誓教寺(台東区元浅草)に葬られた。法名は南院奇誉北斎居士。

また北斎は奇行に富んだ人で、居を九十三度も移し、号を三十九度も改めた。その代表的なものが北斎で、ほかに可候・画狂人北斎・画狂老人・戴斗・前北斎が一・卅・不染居など多くが知られている。約七十年にも及んだ作画生活は終生刻苦勉学に貫かれていて、その情熱は当時の絵師としてはまれにみるところであった。北斎の画域はいずれも幅広く、風景画・花鳥画・歴史画・戯画・美人画などにわたたり、いずれも版画・肉筆・摺物の優品を残している。代表作には、『詩哥写真鏡』(十枚揃)、『百人一首うばが絵とき』、『千絵の海』、『勝景奇覧』、『百物語』、『琉球八景』、『花鳥画十枚揃二種』、『亀・馬・鯉』などを題材としたものなどが版画にあり、版本に『絵本隅田川』(兩岸一覽)、『三冊』、『絵本狂歌山満多山』(三冊)、『富嶽百景』(三冊)などがあり、肉筆に『夜鷹』、『七夕』、『踊』、『汐干狩』、『春秋美人』(双幅)などはなはだ多く、その総括研究はまだ達せられていない。

飯島虚心『葛飾北斎伝』(蓬板閣 明治二十四年(一八八九)一)

飯島虚心(鈴木重三校註)『葛飾北斎伝』(岩波文庫 平成十一年(一九九八)八月)

岡良三郎編『浮世絵大系』第八卷(集英社 昭和五十年(一九七五)七五)

辻惟雄著『日本の美術』第三十一卷(小学館 昭和五十七年(一九八二)六月)

永田生慈『葛飾北斎』吉川弘文館(歴史文化ライブラリー 91 平成十二年(二〇〇〇)五月)

村松梢風『本朝画人伝』巻三(中公文庫 昭和五十一年(一九

リチャード・レイン(竹内泰之訳)『伝記画集 北斎』(河出書房

新社 平成七年(一九九五)三月)

●隠士【一九②】

(「いんじ」とも)俗世間との交渉を断つて、ひとり暮らす人。俗世を離れて静かな生活をしている人。また、そういう生活態度の人。隠者。世捨人。

●遊民【一九④】

定まった職業を持たず、仕事もしないで遊んでいる人。職につかず遊び暮らしている人。のらくら者。ここでは、世俗を離れて人生の楽しみを追求人をさす。

■葛飾の隠士何某などと得意に号している江戸のいわゆる遊民も少なくない。【一九②】④】

清方の随筆『新江東図説(昭和十二年(一九三七)九月)には次のように記されている。

明治の文人墨客は江東の風趣を愛して、詩に賦し、歌に詠じ、盃を挙げては四時の雅懐をこのところに寄せて倦くことを知らなかつた。

墨水の東、小梅、向島、綾瀬、寺島、亀井戸、柳島。往昔葛飾の名で呼ばれたこれらの近郊は、江戸末期から都門の紅塵を避け風流を楽しむ人々の間に悦ばれて、富めるものは別墅を構へ、只その景趣を賞するものは杖を曳いて行楽に親しんだのだが、世が変り、明治となつて、更にこゝが隠栖の地として東京人に愛でられるに至つたのは、長江一帯を境にして、熱鬧と静寂、都と田舎の、渡れば橋あり船もあつて、さのみの不便も感じずに、物騒がしい町中を全く離れた浮世の外の心易き、月雪のたのしみ心ゆくまで、とかく出不精の東京人にとつて、こんな詠へ向きなところはまたあるまじと思はれたからであらう。

〔楠木清方文集 五 名所古跡〕(一一頁)

小梅、向島など、教科書本文との地名の重なりも確認できる。

清方の随筆『歴史のある顔』(昭和十六年(一九四二)十一月)には更に詳細に記されている。

明治維新と一緒に、東都は今までの江戸つ子ばかりの土地ではなくなつて、新興勢力といへる薩長の大官小官、また諸国から新しく帝都を目がけて出て来たものが夥しい数にのぼつて、東京は日に日に賑ひを増して来た。

その時古い江戸人は長い橋を渡つて、本所、深川へ退却するものが多かつたといふことである。それからあらぬか、幕臣であつた人だの、商人の隠居だの、向島に隠れ家を求めた者がかなりあつて、もつとずつと後、明治の中期には、こゝが文人村の觀を呈したことがある。幸田露伴先生が墨堤を去れてから、もう文人の跡を絶つて了つたが、向島へ来て思ひ出すのは成島柳北である。

長命寺の境内にはその肖像を浮彫にした石碑が、今に残つてはゐるが、あたりも荒れて、高い鼻が震災に欠けたまゝで、碑も下の方が土に埋もれて碑文を読むことも出来なくなつてゐる。旧幕の奥儒者の中でも有名であつた成島家、柳北は司直の孫で、徳川幕府の倒れる直前には、騎兵奉行、外国奉行、会計の副総裁として参政の要路に立ち国事にとめたのが、慶喜公の恭順と一緒に市井に降り、向島に閑居して後に朝野新聞社長となつて遷上漁史の名にかくれて文人の生活を送つた。

須崎村の柳畑といふところには、依田学海、榎本梁川(武揚)、柳北仙史が近隣に住居を構へてゐたことがある。『墨水二十四景記』に学海居士が、「春秋佳日ニ来住シテ風月ヲ譚リ書画ヲ品ス」風流の交りを窺ふことが出来る。榎本武揚はその頃は明治新政府の頭官とはなつてゐたがやはり幕臣であるこ

とはいふまでもない。学海は下総佐倉藩士で幕末には藩主である堀田に用ひられて、維新の変革時に働いてゐたが、退官後は文事三昧、専ら演劇の改良に骨を折つた。この人達はいづれも幕府の最後の幕の下りるまで、天下国家と共に徳川家のために尽したので、いはゆる討幕の側に立つたものは、勿論江戸にゐるわけもないが、これらの人が当時大きい川を隔てただけで、今の東京郊外などよりずっと田舎びてゐた、さうして名所古跡に恵まれた隅田川の東岸移つて、それぞれの立場を持ちながら風流を楽しんだのも、明治聖世の余沢であつたらう。

三囲、長命寺、木母寺、その他向島の名所にたとへば石碑だとか、銅像は勿論だが、明治年代に建立されたものは、江戸時代より多く見かける。これなども明治の代にこの土地がどんなに東京人のあこがれの里であつたかを示すしといへる。

●文化・文政【一九⑥】

文化・文政（一八〇四—一三〇）ころの江戸中心の町人文化。大江戸文化ともいう。しかし広義には、十八世紀後半から十九世紀前半の長い時代文化のことをさすので、その様式も広範囲にわたり、その内容も複雑多岐になる。その中心は小市民的な合理主義や美的情緒であるが、幕藩制社会の弛緩の時代にあつたため、一方で生々の・娯楽的要素が強いとともに、他方で政治的・批判的要素を含むのが特色である。

都市農村を問わず化政期前後になると、社交や教習が民衆の日常生活の一部を占めてくる。民衆生活の余裕の拡大と生活文化の享受が、社交や教習の盛んとなる理由である。正月、五月、九月の満月の夜に日の出を待つ日待、二十三夜待、庚申待など、日待月のなかば娯楽行事化がある。江戸でも『東都歳時記』（斎藤月岑 天保七年（一八三六））にみられる年中行事があり、伊勢講や富

士講など講中の宗教的行事があるが、いずれも社交に基礎を置く生活文化の盛行である。民衆の教習についても学問、風俗、室内芸、舞台芸とさまざまであるが、室内芸でいえば花道、茶道、香道、和歌、書道、画工、連歌、俳諧、囲碁、将棋があり、いずれも家元の指導下で行われる安定した生活文化の教習といえよう。とくに注目されるのは、侍、町人の身分を超えた知識人たちのやや知的な社交である。

そうしたなかで日本画の円山応挙や呉春（松村月溪）、また伊藤若冲が生まれ、文人画の田能村竹田や渡辺崋山が活躍する。この方面の代表作、池大雅・与謝蕪村合作の『十便十宜圖』は雅の最たるものといえよう。なお洋画銅版画の司馬江漢や亜欧堂田善の出現もこの時代ならばこそである。また俗では、江戸で旗本や札差らの絵暦の交換会から、鈴木春信の美人画、それも浮世絵、錦絵が誕生した。春信の優美な美人画のあと鳥居清長、喜多川歌麿、五渡亭国貞、溪斎英泉と続くが、歌麿の『婦人相学十躰』や英泉の『浮世風俗美女競』は江戸女の「いき」や「はり」の美を表現したものといえよう。また雅俗を超えて『北斎漫画』や崋山の『一掃百態』は、民衆を活写して秀逸である。

詩歌のほうは柄井川柳の『誹風柳多留』や太田南畝の狂歌、小林一茶の『おらが春』が有名となつた。小説のほうでは短編遊里小説の洒落本、その絵草紙化である黄表紙が誕生したが、通や「うがち」の知的遊びが横溢している。これを集大成したのが山東京伝で、洒落本『傾城買四十八手』はその代表作である。ついで式亭三馬の滑稽本『浮世床』『浮世風呂』が人情風俗を描き、柳亭種彦の絵草紙合巻『修紫田舎源氏』が古典にあわせて当世を活写し、為永春水の人情本『春色梅児誉美』が市井の男女の人情を主張する。いずれも日常生活の余裕の産物である。なお、文化「ころブーム」となった朝顔栽培のような園芸も、寺門静軒の『江戸繁昌記』（天保三—七）一

八三二—一三六)にみえる寄席の話芸も生活文化の所産である。

民衆の日常生活の余裕は、外なる未知の世界への行動を可能とし、その体験が人間的成長に有効なことが知られてくる。まず世俗的な面からいえば、物見遊山や湯治のような旅行体験であろう。伊勢参りのようなものも、実は京大坂廻りが目的とされた。こうした旅行の記録が橋南翁、菅江真澄、鈴木牧之らの紀行文や見聞記となる。代表として司馬江漢の『長崎西遊旅譚』がある。十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』もまたそうした体験の俗耳に入りやすい例といえることができる。浮世絵風景版画の葛飾北斎『富嶽三十六景』や安藤広重『東海道五十三次』などはまさに未知の体験の伝達であり、旅行済みの向きには旅の詩情の視覚的記録であった。次に宗教的な面でいえば、伊勢参り、善光寺参り、金毘羅参りがあり、また一つの社寺に百度詣りするのではなく千社詣りにその効果を期待する流行があった。外(外)への要求のなかで、坂東、秩父、江戸、西国の三十三所の聖地巡礼が普及するのも当然である。さらに高山登拝信仰も盛んとなる。宝暦(一七五一—一七六四)以来富士講が江戸中心に関東一円に広がり、毎年講中の何人かが実際に登頂するのである。幕府はたびたび禁令を出して富士講を弾圧している。さらに前人未踏の北アルプスの槍ヶ岳まで文政十一年(一八二八)に念仏修験行者播隆らが登頂に成功して仏像を安置し、その登拝への道が開かれた。

日常生活とはまったく異質な世界を、祭礼や演劇や文学の世界で創造したり享受したりできるようになった。まず文政の町触にみられるように、江戸の神田、山王両社やそのほか町かぎりの小祭で、仮面や仮装の盛行があった。次に『歌舞伎年代記』(文化一年(一八〇四))を編集できるほど江戸歌舞伎の伝統が蓄積され、まずはその華麗な世界の展開が目目される。『京鹿子娘道成寺』(宝暦三年(一七五三))は歌舞伎の舞踊と音楽の決定版となる優雅なもので

あった。また若井半四郎の七変化舞踊(文化三年(一八〇六))以来、一人が早替りて踊る連続舞踊曲の変化ものが流行し、民衆は非日常的な華麗な世界に酔うこととなる。また鶴屋南北の『東海道四谷怪談』は、舞台にしたたかな悪の世界を展開したもので、恐ろしい悪態の芝居であった。こうした非日常的な芝居の世界の創造に、やがて欠かせぬものとなるのは回り舞台などからくりであり、主人公たちの刺青の登場であろう。演劇に関係なくいえば、「からくり」では細川半蔵『機巧図彙』(寛政八年(一七九六))が優れ、刺青では浮世絵の役者絵、武者絵にすばらしいものが多い。一勇斎国芳『通俗水滸伝豪傑百八人之一個』(文政十年(一八二七))がその始まりで、国貞や国周によって刺青役者絵の新しいジャンルができた。さて芝居に即していえば、浮世絵、役者絵の発達を先に指摘すべきであった。勝川春章、東洲斎写楽、歌川豊国、五渡亭国貞がそれで、写楽の役者大首絵がとくに有名である。

なお音楽について補足すれば、中村歌右衛門上演の七変化もの『遅桜手爾波七字』(文化八年(一八一))で公表された長唄の名曲『越後獅子』や、純音楽つまり座敷長唄『吾妻八景』(文政十二年(一八二九))がある。そして上方の光崎檢校『弦曲大榎抄』(文政十一年(一八二八))のような三味線の精巧な楽譜の発明も忘れてはならない。

また付言するならば、化政期の歌舞伎よりも、柳亭種彦らの草双紙合巻のほうに誌上歌舞伎として喜ばれていた。貸本などで安く手にすることができたからであろう。さらに貸本で大衆にアピールしたものに、読本伝奇的世界の創造がある。早くは上方の上田秋成『雨月物語』があり、当代では曲亭馬琴の『椿説弓張月』(北斎画)や『南総里見八犬伝』など、勸善懲惡の保守的ムードをもつといえ、すばらしいロマンの世界を構築したものといえよう。

北島正元「化政期の政治と民衆」(『近世の民衆と都市 幕藩

「国家の構造」名著出版 昭和五十九年（一九八四）六月）

永原慶二、青木美智男編『大系日本の歴史Ⅱ 近代の予兆』

（小学館 平成一年（一九八九）二月）

藤田覚『海防論と東アジア』（青木美智男・河内八郎編『講座
日本近世史』第七巻 有斐閣 昭和六十年（一九八五）五
月）

●真間の継橋（一九〇）

千葉県市川市真間にあつた継橋で歌枕となつている。『江戸名所
図会』には次のような記述がある。（第七巻二十冊百五十七丁）

真間の継ぎ橋 弘法寺の大門石階の下、南の方の小川に架
すところの、ふたつの橋の中なる小橋をさしていへり（ある人い
ふ、古へは、兩岸より板をもて中梁にて打ちかけたるゆゑに、継
ぎはしといふなりと。さもあるべきにや）。

『万葉集』

安能於都世受由可牟古馬母我可都思加乃麻末乃都藝波

志夜麻受可欲波牟

『新勅撰』

勝鹿やむかしのままの継ぎ橋をわすれずわたる春がすみ

かな 慈円

『風雅集』（二四世紀・勅集）

五月雨に越え行く波はかつしかやかつかみかくるる真間の継

ぎ橋 雅経

同

かつしかのままの浦風吹きにけり夕波越ゆるよどのつぎは

し 朝村

按ずるに、朝村の和歌に「よどのつぎはし」とあるは、水の
澱みにかけたりといふ意にて、山城の淀とは異なり。

入重玄門倒修凡事の意を

ここに人を渡しはてんとせしほどにわが身はもとのままの継
ぎ橋 日蓮

真間の継橋は下総の国府が向かうための橋で、砂
洲を中継地点として複数の板橋を架け渡してあつたことからこの名
を得たという。この一帯は「真間の入江」と呼ばれる海岸地帯で、蘆
の生い茂つた砂洲がひろがつていた。『江戸名所図会』にもある通り、
『万葉集』（巻十四 東歌 三六七）に「足の音せず行かん駒もが飾の真
間の継ぎ橋やまず通はん」と古くから称されていたことがわかる。
後世、近隣に伝わる手児奈の悲話の伝承とあいまってその名は広く
知られ、元禄九年（一六九六）に鈴木長頼が推定地に「真間の三
碑」を建てた。幕末期、歌川広重は名所絵「名所江戸百景」の中で
「真間の紅葉手古那の社つぎ橋」と題する一枚を描いている。この
画題の意味は「真間の紅葉の名所（弘法寺）から「手古那の社」と「継
橋」とを望む」ということで、画中をよく見ると遠方に橋が見える
が、これが広重の描いた「真間の継橋」であつた。背後には田んぼが
ひろがり、すでに新田開発もひととおり進んで、周囲は農村地帯と
なつていたことがわかる。現在では周囲は住宅街になつている。かつ
ての橋を記念して擬宝珠つきの真つ赤な欄干が建てられているが、
その下に川はもはや流れていない。

●あしのいおり（一九〇）

蘆で屋根や壁を造つた、小さな、粗末な仮小屋、自分の家。原典
では「蘆の廬」とある。

●江戸名所図会（一九〇）

江戸およびその近郊の絵入り地誌。編者は斎藤幸雄（長秋）、幸
孝（泉麻呂・莞齋）、幸成（月峯）の父子三代。画は長谷川宗秀（雪
且）。天保五年（一八三四）・七年（一八三六）刊。七巻二十冊。版元
は江戸の書肆須原屋茂兵衛・同伊八。斎藤家は、神田雉子町の名
主であつたが、文事に関心が深く、まず幸雄が寛政年中（一七八九

一八〇二に江戸府内および近郊を実地に調査して草稿を作成、寛政十年（一七九八）五月に幕府の出版許可をうけた。しかしこの時は実際には出版されず、幸雄は寛政十一年（一七九九）に没し、子の幸孝がその業をついだ。幸孝は、はじめ北尾重政画の挿絵の予定であったのを長谷川雪且に変更し、幸雄の草稿にさらに校訂を加え、また新たに江戸近郊部分を増補するなどしたが、やはり出版を実現させぬままに文政一年（一八一八）に没した。幸成は祖父・父の遺稿にさらに校訂を加え、ついに天保五年（一八三四）に三卷十冊、天保七年（一八三六）に四卷十冊を刊行した。内容は、卷一に武蔵および江戸の名義、江戸城の沿革、ついで日本橋・神田・京橋・芝の地域をおさめ、卷二は東海道に沿って品川・大森から南は金沢までを記してある。以下方角的には右廻りに主として街道にそつて江戸府内から遠く西は多摩郡の府中・日野、北は浦和・大宮、東は市川・船橋辺にまで及び、江戸名所図会とはいいながら、実際には武蔵名所図会とも称すべきものである。記事は神社・仏閣・古蹟名所を挙げ、その現状・沿革を述べてあるが、すべて実地調査にもとづくもので、史料の価値が高い。さらに、この書の価値を一層高からしめているのは雪且の絵で、実地の写生にもとづく精緻を極めた精密な描写は、文章に表現しきれない当時の景観や行事、風俗を知ろうえでの好史料とされている。文化・文政期から天保期にかけての江戸の生活史料としても好適である。本書の成立を窺うに参考となるものに、幸孝の实地調査記録である『郊遊漫録』（九冊 国立国会図書館蔵）および『武蔵聞見録』（東京都立中央図書館蔵）や、幸成の日記『斎藤月岑日記』（東大史料編纂所蔵）がある。清方にとつて、『江戸名所図会』は、父採菊の形見であり、座右の書であった。「古跡」（昭和三十四年（一九五九）一月）という文章の中で次のように記している。

私の所持する「江戸名所図会」は、亡父が遺してくれた、

たゞ一つの形見なのである。

この本と私とのあひだには、何か、宿世の縁とでも云つたやうな、目に見えない絆の糸が絡んでゐるのではないかと思ふことがあつた。

父は江戸末期の文人で、明治には新聞人となつたが、壮年にかいたものや、その交友との消息に見ても、当時の文人生活を乱世の中にも楽しんでゐたやうである。

父はこの書を譲つてくれるに當つて、別に考へあつたわけでも無からうが、後になつて見ると、父に譲られたのは、たゞ和紙木版摺の本だけではなくて、父が愛してゐた江戸への郷愁とも云ふべきものを、ソツクリ私に肩がはりをさせたのだと、さう思ふほど長い年月に亘つてこの本は江戸の息吹を私に与へてくれた。

座右の書は人に依り、職に依つて、それぞれ違ふのは云ふを俟たぬが、私の身辺からはとんとこの本が離れたことがない。久しい前に、ある雑誌からある雑誌から愛読書のアンケートを徴されて、先づ第一にこれを挙げた。掲載誌の送られて来たのを見ると、露伴先生の回答からもその署名を見出すことが出来て、たいさう嬉しく思つたこともあつた。（紫陽花舎隨筆）六興出版 昭和五十三年（一九七八）一月 二二四—二二五頁）

市古夏生、鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』全六巻（ちくま学芸文庫 平成八年（一九九六）九月—平成九年（一九九七）二月）

市古夏生、鈴木健一編『江戸切絵図集』（ちくま学芸文庫 平成九年（一九九七）四月）

市古夏生、鈴木健一編『江戸名所図会事典』（ちくま学芸文庫 平成九年（一九九七）六月）

鈴木棠三、朝倉治彦校注『江戸名所図会』全六卷(角川文庫

昭和四十一年—四十二年(一九六六—一九六八)

鈴木棠三、朝倉治彦校注『江戸切絵図集』(角川文庫 昭和四十三年(一九六八))

市古夏生、鈴木健一校注『都名所図会』全五卷(ちくま学芸文

庫 平成十一年(一九九九))

竹村俊則校注『都名所図会』上下巻(角川文庫 昭和四十三年(一九六八))

●江戸川(一九⑩)

関東地方を流れる利根川の分流。利根川中流の千葉県東葛飾郡関宿町の近辺、茨城県猿島郡五霞村で利根川から分流し、千葉県と埼玉県および東京都の境界にほぼ近く南流し、東葛飾郡浦安町で東京湾に注ぐ全長約六十キロの河川。江戸川は、古くは利根川の水系に属さず、その上流は渡良瀬川であり、下流を太日(太井)川と称した。『類聚三代格』更級日記『吾妻鏡』などには、この名称であらわれている。流路は房川渡(埼玉県北葛飾郡栗橋町栗橋)から五霞村の中央を貫流し、北葛飾郡杉戸町椿から庄内古川の河道に入り、同松伏町金杉で現在の江戸川流路に入って南流していた。しかるに戦国時代から江戸時代初期にかけて、たびたび利根川中流地域の治水工事が行われ、江戸幕府は江戸を水害から守るため、承応三年(一六五四)利根川と渡良瀬川の河道を変え、銚子へ東流させてから、利根川分流の江戸川となった。もともと重要な影響を与えたのは、寛永年間(一六二四—一四四)の利根川東流の大改修工事であった。これに伴って、寛永十七年(一六三〇)ごろからほぼ十余年を費やして権現堂川・逆川および関宿—金杉間に新川が開掘され、ついに利根川の一支流となるに至った。この河流が、太井川の旧名が廢れて江戸川となったのは、江戸に至る水運上重要な役割をになったためであった。すなわち東北地方から太平洋岸

を南下した廻米その他の物資は、銚子から利根川を遡行してこの江戸川に入り、江戸川の下流行徳付近に至り、さらに江戸川の分流である長さ約六キロの船堀川を西流して中川に達し、小名木川を通過して江戸に通じた。すなわち、江戸川の名は、江戸に通ずる運河の意味でもあった。江戸川の流路に沿っては、野田・流山などの醸造業地帯、行徳の塩田地帯などがあり、このような江戸周辺の産業発達にも大きな影響を与えた。

江戸の西北郊目白台から舟河原橋(旧牛込と小石川間に架した橋、現在の飯田橋駅前)の間を流れる河流。江戸川の上流は、井の頭池を水源とし、途中善福寺池・妙正寺池などから発する水流を合わせて高田・目白台に至る。ここに堰を設けて神田上水を分水し、本流は江戸川となり、舟河原橋より下流は平川に流入した。江戸川は旧名小川とも称したという。しかし元和二年(一六一六)に江戸城外濠工事の一環として平川の付替工事が行われ、平川が締め切られ、江戸川は神田川(外濠に通じて水脈が一変した)。

また、かつては千葉県浦安市と東京都江戸川区の間を流れ東京湾に注ぐ流路を江戸川といったが、大正八年(一九一九)千葉県市川市に江戸川放水路を開削し、現河川法では、下流部は江戸川放水路が本流、もとの江戸川を旧江戸川とよんでいる。江戸時代は、利根川水運で栄え、いわゆる内川回りとして、銚子、佐原、野田、流山を経、海産物や醸造品の大半が江戸川を利用して江戸に運ばれた。明治二十三年(一八九〇)利根運河を野田下流に開いて水路短縮が図られ、明治末まで隆盛を保ったが、鉄道の開通によって大正時代以後、水運は急激に衰微した。現在は、葛飾地域の幹線排水路、さらに東京都の江東地区と左岸の沿岸諸都市と船橋市、千葉市の上水道源になっており、産業用水にも利用されている。江戸川が形成した沖積低地は、潮入りの被害があるため、江戸時代は、ス田が多く、行徳付近は塩田であったが、近年の都市化の進行、と

くに菅団地下鉄(現東京メトロ)東西線開通(昭和四十四年(一九六九)後の沿線変貌は著しい。下流に東京都立水元公園と江戸川水門があり、浦安市の埋立地には大遊園地東京デイズニールランドがある。

栗原良輔『利根川治水史』(官界公論社 昭和十八年(一九四三))

蘆田伊人編『御府内備考』巻四十六(『大日本地誌大系』第二巻 雄山閣 昭和八年(一九三三))

●利根川(一九⑩)

群馬・新潟県境の大水上山付近に源流をもち、関東平野を北西から南東斜めに横断し、銚子付近で太平洋に注ぐ川。源流が上野国利根郡と考えられていたのでその名がある。俗に坂東太郎とも呼ばれ日本三大河の第一。幹川流路延長は三百二十二キロで信濃川につぎ日本第二位、支流数は二百八十五もあり、主なものに片品川・吾妻川・烏川・渡良瀬川・鬼怒川・小貝川などがあり、江戸川を分流し、かつては手賀沼・印旛沼に接続し、霞ヶ浦・北浦の水を入れて、その全流域面積は一万六千八百四十平方キロと日本最大である。しかし、この流路は近世前期以後のものであって、それ以前の利根川本流は現埼玉県北埼玉郡大利根町佐波の少し上流から南下し、現在の古利根川筋を流下して東京湾に注いでいた。また渡良瀬川もこれと並行して東側を南流し、下流は太日川などと呼ばれており、鬼怒川・小貝川や常陸川(現利根川下流)とは別水系であった。この利根川の本流を東へ東へと付け替え、最後には太平洋へ注ぐようにしたのは、近世初期より数度にわたって実施された江戸幕府による改流工事であった。その最初は元和七年(一六二二)で、新川通りおよび赤堀川を開削して利根川を渡良瀬川に合流させ、常陸川筋へ落とそうとしたが、赤堀川の通水には失敗した。寛永十二年(一六三五)、現江戸川上流の開削に着手し、利根川・渡良瀬川の

合流を現埼玉県幸手市権現堂の北で東方に曲げてこの流頭に結び、その結節点から北に逆川を掘って下総国関宿の北で常陸川の上流と結んだ。この工事の完成が寛永十八年(一六四二)年のことという。しかし、逆川開削の意図に反して、権現堂川の本流を常陸川に流すことはできず、現江戸川筋を利根本流は下った。また常陸川筋では、寛永六年(一六二九)に鬼怒川と小貝川を分離し、鬼怒川の常陸川への落口を約二十キロばかり上流に移した。承応三年(一六五四)にようやく赤堀川三番堀工事によって利根川本流が赤堀川を

通って常陸川に流入し、はじめて利根川が銚子河口より太平洋に流出することとなった。この三十年余にわたる利根川本支流東遷工事の目的は、江戸を水害より守るため、新田開発のためなど諸説が過去にはあったが、その第一の目的は、江戸を中心として関東各地と結ぶ舟運路の創出にあった。古代・戦国時代の利根川流域の河川水運は、『万葉集』巻十四に「埼玉の津に居る舟の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね(一八〇)」とあり、文永年間(一一六四―七五)には下総神崎で伊豆走湯山燈油料船が争論をおこし、北条氏照判物には佐倉から関宿、葛西から栗橋への川船通行がみられるなど、断片的な史料でその存在が知られる。近世に入ると、文禄一年(一五九二)に武州忍埼玉県行田市)から下総上代(千葉県香取郡干潟町・東庄町)に移封となった松平家忠は、忍新郷より川船で下総小見川に着船しており、家忠はまた小見川より江戸へ兵糧舟を何回も出しているの、このころでも利根川・渡良瀬川筋と常陸川筋は、湿地帯内の細流などによって、わずかに連絡していたものと思われる。この後、幕府の利根川東遷を中心とする河川改流工事の完成により、利根川河川水運は急速な発展をみる。利根川本支流や湖沼の沿岸に多数の「河岸」が成立し、元禄三年(一六九〇)に幕府がこれらの河岸から江戸への廻米運賃などを定めた改帳には、八十余の河岸が記されている。そして利根川本流は前橋まで、烏川

は上州倉賀野(群馬県高崎市)まで、鐮川は上州下仁田まで、渡良瀬川は野州猿田(栃木県足利市)まで、思川・巴波川は野州栃木・壬生まで、鬼怒川は野州阿久津(栃木県塩谷郡氏家町)まで川船が逆行し、下流は銚子湊や那珂湊を通して東廻海運に接続し、奥羽の諸物資が下利根川・江戸川を通じて江戸に送られた。この川船は高瀬船・ひらた船、上流では下船・小鵜飼船などと呼ばれる大小の川船で、沿岸の農漁村から年貢米をはじめ商米・雑穀・蔬菜・薪・材木・干鰯・鮭・鮒・鮮魚などを江戸へ送り、江戸からは主に日用雑貨・衣料・塩などが送り出された。このような水運の発達は、沿岸地域の産業にも刺激を与え、銚子・水海道・野田などの醬油醸造業、佐原の酒造業、流山のみりん醸造業なども勃興し、原料・製品の輸送はすべてこの水運によった。また利根川水運は物資ばかりでなく旅人も運び、関境から江戸へ下る乗合夜船や、利根川下流の三社(香取・鹿島・息栖)参詣の貸切遊覧船「木下茶船」などが江戸人士の人気を得て盛んとなり、松尾芭蕉をはじめ十返舎一九・小林一茶・村田春海・高田与清・平田篤胤・渡辺畢山など多くの文人墨客が来遊し、沿岸地域に下総国学形成などの種々の影響を与え、宮負定雄、佐原の伊能忠敬・楢取魚彦・久保木清淵、銚子の宮内嘉長、潮来の宮本茶村、布川(茨城県北相馬郡利根町)の赤松宗旦など多くの思想家・学者を輩出した。明治期に入ると、中利根川と江戸川中流を結ぶ利根運河が開通し、東京両国と古河・銚子間などに蒸気船が就航するなど、一時は大変な活況を呈したが、鉄道の普及によつて徐々に輸送荷物が減少し、特に明治三十年代から河川改修工事方針の変化は、河川を水運に適さぬものとし、利根川水運も大きな打撃を受けた。しかし利根川下流地域や霞ヶ浦などでは、鉄道と結んでなお水運が重要な役割を担っていたが、昭和三十年代からの大型トラック輸送の発達により、最終的に消滅した。

赤松宗旦『利根川図志』岩波文庫 昭和十三年(一九三八)

吉田東伍『利根治水論考』(日本歴史地理学会 明治四十三年(一九一〇)十二月)

根岸明蔵『利根川治水考』(崙書房 昭和五十二年(一九七七)三月)

栗原良蔵『利根川治水史』(官界公論社 昭和十八年(一九四三))

小出博『利根川と淀川——東日本・西日本の歴史的展開』(『中公新書』384 昭和五十年(一九七五))

大熊孝『利根川治水の変遷と水害』(東京大学出版会 昭和五十六年(一九八一)二月)

川名登『河岸に生きる人びと——利根川水運の社会史』(平凡社 昭和五十七年(一九八二)十月)

川名登『近世日本水運史の研究』(雄山閣出版 昭和五十九年(一九八四)十二月)

丹治健蔵『関東河川水運史の研究』(法政大学出版局 昭和五十九年(一九八四)二月)

●太井河【一九〇】
太井川。太日川。千葉県の西境を流れる江戸川の古称。古くは渡良瀬川の下流をなした。「更級日記」に「しもつさの国と、武蔵との境にてあるふとゐがは」という記述が見られる。

●江戸名所図会には、今の江戸川を……「つもない」【一九〇】
『江戸名所図会』の「新利根川」の項に「太井河」、「かつしかの河」の名は見えるが、「江戸川」の名は見えない。(七巻二十冊一四三丁)

新利根川 (『万葉集』刀禰に作り、活字板『源平盛衰記』利根に作れり)。旧名を太井河といふ(この号、『更級日記』および『東鑑』等の書に見えたり。また、『清輔奥義抄』に「云く、「下総

国かつしかの郡のうちに大河あり、ふと井といふ。河の東をば東

の郡といひ、河の西をば西の郡といふ」とあり。証とすべし。私に云く、この河より西は西と称して、いま武蔵国に属す。また、『北条五代記』国府台合戦の条下には、からめき川といふよし見えたり。世俗、坂東太郎と称し、あるいは文巻川、またかつしかの河とも唱へたり。行徳を流るるゆゑに行徳川とも号く。水源は上野国利根郡文殊岳の幽谷より発し、高科川・吾妻川・烏川・碓井川、および信州の国郡より出づるところの諸流合し、武州幡羅郡に至り一河となる。また上州渡瀬川も利根に落ち会ひ、栗橋より分流して、一流は北総に入り、関宿・木嵐等の地に傍ひて東流し、銚子に至り海に帰す。これを利根川と号く(坂東太郎と字す)。一流は武蔵・下総の間を南へ流れ、国府台の下を行徳の方へ曲流し、海水に帰せり(これを新利根川と称す)。

注

- 1 『釧路論集』第四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十二年(二〇一〇)十一月 一一—四頁
- 2 『北海道教育大学紀要』(教育科学編)第六十三卷第一号 北海道教育大学 平成二十四年(二〇一二)八月 一一—四頁
- 3 『北海道教育大学紀要』(教育科学編)第六十三卷第二号 北海道教育大学 平成二十五年(二〇一三)二月 一一—六頁
- 4 尚、「」内の()数字は、「教材」地図をいろどる」考(1)、「教材」地図をいろどる」考(2)、「教材」地図をいろどる」考(3)の末尾数字をそれぞれ示すものである。

※ 本稿は、引用に際し、適宜旧字を新字に改めた。

※ 本稿は、科研費・基盤研究(C)(23531235)による成果の一部である。